

種智院大學 同窓會報

第19号

平成8年2月28日

京都市南区壬生通八条下る東寺町545
種智院大学同窓会

平成7年度総会開催

梅雨の合間の晴れの一日、恒例のとおり、今年度総会が母校講堂にて開催。今年は、阪神・淡路大震災により、同震災の犠牲者追悼と同窓会物故者慰霊の法要から始められた。導師は東野学明師（昭和16年）。この法要をふまえて、会長・池田瑩輝猥下が挨拶され、今総会の記念講演である震災にたいする寺院建築を考え、震災の悲劇を繰り返さないことの意義を述べられた。

次に、来賓挨拶に入り、まず真言宗京都学園理事長・吉田裕信猥下より、総会の盛会と同窓会の隆盛をお祝いするとともに、本学園の発展を皆様とともに進めていきたいとの挨拶があった。次に種智院大学学長・今井圓明猥下より、大学の現況をふまえて挨拶がおこなわれた。それによると、大学は臨時定員増によりこれまでにない発展をみせているが、それは平成11年までで、それ以降については不透明の状態にある。この臨時定員増を恒常化するためには、まずもって、大学自身が自己点検・評価を通して、その姿を確かめ、大学運営の正常化のために何が必要かを明らかにすること、このことを通じて大学の将来計画を進める必要がある。そのため、現在大学の先生方に早急に自己点検・評価を行うことを促している。今後将来計画の策定をとおして、大学の将来を明らかにしていく。

続いて議事に入り、東田教範師（西中国支部長）を座長に選出。第一号議案「平成6年度事業報告並びに平成6年度決算報告（監査報告を含む）」について審議。事務局からの報告と監査・川村俊朝師から決算報告が適正になされている旨の報告をふまえて審議。昨年度より、大学当局の協力により卒業予定者及び新入学生から終身会費を徴収することになり、大幅な増収となったことなどが報告され、原案を承認。第二号議案「平成7年度事業計画並びに平成7年度予算」について、事務局からの報告と幹事会において、支部活動の促進

について話しあわれた旨の報告もなされた。この議案についても、原案のとおり承認。第3号議案「役員選出委員の選任について」は、次年度が役員改選期にあたることから、前回同様に役員選出委員を選出していきたい旨、提案理由の説明が事務局よりあり、これを受けて幹事会にて、その選出を会長、座長、事務局の協議に委ねる旨の了承があり、その結果、卒業年次・関係本山等を考慮して次の方々をお願いしてはどうかとの提案がなされ、今総会の承認を得た。

役員選出委員に、田中実道師（昭和22年、大阪支部長、泉涌寺）森見章師（昭和23年、副会長、高野山）東田教範師（昭和24年、西中国支部長、東寺）足立有教師（昭和28年、幹事、大覚寺）川井宏雄師（昭和35年、本山協力委員、仁和寺）の各師が選任された。

第4号議案は「顧問推戴の件」で、大本山大覚寺門跡・上井寛圓猥下を顧問に推戴することを承認。

以上で今年度総会の議事を終了。つづいて、総会記念講演を開催。

「阪神大震災とこれからの寺院建築」と題する記念講演について、会長池田瑩輝猥下より、次のような趣旨説明が行われた。大震災の直後、直ちに現地に入り、詳細な調査を『月刊 住職』誌上に報告をされ、寺院建築の今後にも示唆に富む提案をされたことで、この同窓会においても是非、報告をとの思いで、お願いしたと述べられた。松井建設からは、大阪支店長・倉田正則氏の司会で進行。まず、本社専務・市橋実吾氏より、同窓会の企画にたいするお礼が述べられた。つづいて、取締役技術部長の松縄嶽治氏から、今震災の実状が報告され、社寺建築部副部長の高田正憲氏から震災における寺院建築の被害状況の特色を細部にわたって、スライドを使用して報告があり、さらに、技術部技術課の河田哲治氏から、この被害を

ふまえて今後の建築についての提案がなされた。それによると、まず、側壁の補強に重点をおくこと、そのためには改築等にさいし、壁の補強をすすめ、余計な窓は避けること、天井部分の補強についても十分に意を尽くすことなど提案された。

なお、この記念講演は、当日「仏教と文化」の時間であったが、担当の頼富本宏教授の御指導で受講生も参加、さらに関係新聞紙上で知った方々も多く参加され、会場は満員の盛況となった。

綿密な調査と永年にわたる技術に支えられた松井建設のスタッフによる講演は、説得力に富むものであった。講演終了後は、多くの聴衆から感謝の拍手が続いた。なお、同窓会からの講演謝礼について松井建設から、そのまま同窓会に寄付を申し出されたことであった。

最後に、真言宗京都学園洛南高等学校長・田中純應師から講演にたいするお礼と閉会の挨拶があり、総会の日程を終了した。

続いて、京都グランドホテルにて懇親会に移った。懇親会では、池田会長、手嶋副会長の挨拶があり、乾杯の音頭は遠路北海道から出席した宮本成雄師（昭和28年）がされ、なごやかなうちに会

は進み、各テーブルごとに近況の報告、思い出に花を咲かせた。最後に大阪支部長・田中実道師の発声で万歳を三唱して閉会となった。

出席者〔順不同・敬称略〕

多田 隆信	東野 学明	手嶋 千俊
江坂 宗純	川村 俊朝	新見 智章
田中 実道	衣笠 丹章	秦 祐智
蓮沼 雅春	法本 弘文	吉田 裕信
今井 圓明	田中 純應	宇喜多 恵隆
東田 教範	前田 和連	山田 達圓
石坪 昭真	池田 瑩輝	開田 清治
宮本 成雄	加門 得勇	足立 有教
豊福 光禪	稲塚 信海	北村 議臣
井上 亮淳	沖田 定信	祝 宏友
松村 実秀	土屋 博秀	田畑 祐弘
都筑 大乘	国定 道晃	北村 祐道
玉山 順彦	北尾 隆心	宇垣 泰明
沖津 祐照	岩崎 豊海	佐々木 龍宝
今井 浄圓		

〔大学〕

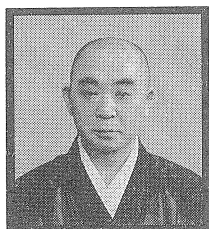
頼富 本宏	吉田 元	宮城洋一郎
児玉 義隆		



平成7年度 種智院大学同窓会総会

(平成7年6月30日 於 種智院大会講堂)

坂本光聰 猯下 御遷化



真言三宝宗第二代管長、大本山清澄寺第三十八世法主・坂本光聰大僧正猯下は、平成7年10月22日に御遷化された。密葬は24日午後1時より、総本山朝護孫子寺前管長鈴木鳳永大僧正導師のもとに営まれ、本葬は11月25日午後1時より高野山真言宗管長稲葉義猛大僧正の導師により営まれた。いずれも千余名の会葬者の参列があり、盛葬であった。

故和上は、昭和22年に本学を卒業され、同27年宗務長、副住職、同44年管長・法主に就任された。爾来、寺門興隆に尽力される一方、事教二相に通曉され、教化指導にも功績を残された。また、鉄斎美術館を建設し、鉄斎研究の著書「世界の鉄斎」を刊行されている。なお、同館の入場料は宝塚市に寄付され、地域文化の振興と向上に尽くされた。

本学の経営本山として、常に陣頭にたつてその発展に寄与され、本学校舎増改築事業においては、絶大なる御尽力を頂いたことであった。

なお、本葬においては、次の方々の弔辞があった。

葬儀委員長 阪急電鉄株式会社会長 小林公平殿

真言各宗総大本山会代表 真言宗長者 総本山長谷寺化主 吉田俊譽猯下

友人代表 前高野山真言宗宗会議長 大福田寺住職 宇賀哲也殿

宝塚市教育長 福田秀治殿

財団法人日本相撲協会理事長 出羽海智敬殿

花柳流関西支部役員 宝塚歌劇団舞踊講師 花柳緑春殿

本葬儀配役は次の通り。

導師 高野山真言宗管長 総本山金剛峰寺座主 稲葉義猛猯下

職衆 信貴山真言宗宗務長 鈴木貴晶殿 彦根長寿院 岡田建三殿

桑名大福田寺 宇賀賢秀殿 京都神護寺 谷内弘照殿

北九州小石観音寺 竹川明秀殿 大阪高野寺 田中秀明殿

香川正覚院 三好祥徳殿 京都醍醐寺中 田中祐考殿

京都戒光寺 渡辺恭章殿 宝塚普門寺 馬形祐憲殿

高野山奥之院中 松浦三明殿 京都醍醐寺中 百目鬼幸秀殿

会奉行 西宮栄潤寺 吉井恵貫殿 清澄寺中 有井良随殿

行事 清澄寺中 曾根諦泉殿 清澄寺中 立葉了禅殿

司会 清澄寺中 岡田康秀殿

<<<支部総会報告>>>

大阪支部

5月31日、午後6時より、大阪市中央区の食道園宗右衛門店にて開催。総会では、田中実道支部長の開会挨拶、池田瑩輝会長からの本部総会への出席のお願いを含めての挨拶、また大学から同窓会事務局宮城氏より大学の現状報告等があった。続いて総会の審議に入り、法本弘文師を座長に選出。平成6年度の活動報告、会計報告を事務局長

の土屋博秀師、会計の玉山順彦師より報告。全会一致で承認。同じく平成7年度予算についても承認された。また、今年度は役員改選期にあたり、下記のとおり役員を選出した。

総会終了後、懇親会に入り、震災の問題、支部活動の今後について意見を交換。今総会では案内状を約120通送り、51通の返信であった。なお、6月25日付で総会の報告を会員に送付。

出席者（順不同・敬称略）

田中 実道	法本 弘文	蓮沼 雅春
西端 良諦	見城 芳行	藤崎 信幸
土屋 博秀	玉山 順彦	上田 靈宣

西田 義範 藤崎 孝之 中江 康明
(来賓)池田 瑩輝 (大学)宮城洋一郎

新 役 員

支部長 田中実道
副支部長 西端良諦 法本弘文 見城芳行
事務局長 土屋博秀
会計 玉山順彦
幹事 蓮沼雅春 藤崎信幸 上田靈宣
岩上匡志 佐野剛空 西田義範
中江康明
監査 北村太道 小西光延
顧問 小松道圓 中塚栄澄 谷田仁司

西中国支部総会

平成7年6月13日(火)午前11時、J R広島駅前ホテルグランヴァイヤーにて開催。支部長東田教範師の開会挨拶。今井圓明学長の母校の現状、将来計画をふまえての挨拶があり、また、同窓会より池田瑩輝会長から今年度同窓会総会への参加のお願いを含めての挨拶があった。議事に入り、山本純一常任幹事を座長に選出。東田支部長より支部活動の現状についての報告、福島尊光副支部長より会計報告がなされ、承認。なお、今後の支部総会のあり方について、(イ)支部会員相互の親睦と研鑽を計る (ロ)母校との関係を密接に保つこと等を確認。特に(イ)を主体に総会のあり方を考える工夫が必要との意見が提起された。つづいて懇親会に入り、母校の入試や将来計画へも話が及んだ。最後は藤原豊善副支部長より閉会の挨拶があり、次回の再会を誓いあった。

出席者(順不同・敬称略)

江坂 宗純 東田 教範 福島 尊光
山本 純一 藤原 豊善 吉武 裕真
今井 圓明 池田 瑩輝 宮城洋一郎

兵庫支部総会

平成7年11月27日(月)、午後5時よりJ R新神戸駅前新神戸オリエンタルホテルにて開催。水谷修夫支部長より大震災にて犠牲となられた方への追悼と復興にむけ奮闘されている方への励ましをふくめて開会の挨拶が述べられた。次に、池田瑩輝同窓会長より、震災と戦争の違いをふまえて今震災の実体験からの挨拶があった。また今井圓明学長より、このたびの震災から「天訓地幸」を学ぶことが提示され、さらに大学の経営基盤の確

立にむけた将来計画について意欲的な抱負を述べられた。続いて会計報告等を審議、承認。また、引続き水谷師に支部長をお願いすることを一致して確認。

懇親会では、震災についてそれぞれの立場から筆舌に尽くしがたい経験が述べられ、未曾有の震災を改めて思うことであった。また、今後の支部総会についても、それぞれが若い会員を勧誘してさらに盛会となるよう確認した。最後に頼富本宏学部長より、大学への引き続きのご支援と兵庫支部の発展を祈念する旨の挨拶を受けて、終了した。

出席者(順不同・敬称略)

水谷 修夫 今井 圓明 池田 瑩輝
足立 有教 加門 得勇 開田 清治
手塚 利貞 祝 宏友 北村 裕道
野々村高広
(大学)頼富 本宏 宮城洋一郎

滋 賀 支 部

支部長・峯覚海師御遷化に伴い、後任の役員について、関係者にて協議の結果、当分の間、下記役員で運営していくことを確認した。(敬称略)

支部長 鷲尾 遍隆(昭和54年)
副支部長 澤 実英(昭和22年)
会 計 斎藤 長久(昭和22年)

また、賛助会員に喜田明憲師を迎えることもあわせて確認。(澤 実英師より報告)

御修法関係の記事は、
次号に掲載致します。

第 2 0 号

(平成8年3月末発行予定)

会員消息 □□□□□□□□

■訃報

- 宮崎 隆雄師(昭和24年)平成6年御逝去
徳島県樫谷寺前住職
- 丹生 実憲師(大正11年)平成6年1月御逝去
兵庫県岩戸寺前住職
- 喜多 好信師(昭和25年)平成6年1月御逝去
高知県法喜院前住職
- 松浦 善澄師(昭和11年)平成6年3月4日御逝去
岡山県善光寺前住職
- 小野 昌道師(昭和13年)平成6年8月18日御逝去
青森県橋雲寺前住職
- 禰宜田房雄師(賛助会員)平成6年9月7日御逝去
京都入峰会
- 原 浩雄師(昭和23年)平成6年12月5日御逝去
佐賀県報身寺住職
- 高藤 圓應氏(昭和10年)平成7年3月3日御逝去
種智院大学名誉教授
- 平見 純雄師(昭和11年)平成7年2月24日御逝去
兵庫県神泉寺前住職
- 深田 修作氏(賛助会員)平成7年3月25日御逝去
榊深田 代表取締役
- 真田 快尊師(昭和17年)平成7年3月30日御逝去
元真言宗東寺派財務部長
神奈川県成就院住職
- 富永 龍心師(昭和56年)平成7年4月22日 大本
山須磨寺本坊にて告別式
- 仲尾 俊博師(旧職員) 平成7年6月24日御逝去
種智院大学名誉教授
- 永幡 智泉師(昭和14年)平成7年7月18日御逝去
岡山県真光寺名誉住職
- 峰 覚海師(昭和23年)平成7年8月21日御逝去
滋賀県宝巖寺住職、同窓
会滋賀県支部支部長、元
真言宗豊山派滋賀支所長

◎同窓生短信

- 土井 格明師(大正6年) 震災のお見舞い状頂
きお礼申し上げます。私は百二歳になりますが、
生まれて初めての地震でした。
「やー地震 ハネおきにけり 冬の朝」
長谷川寛景師(昭和12年)母校の順調な経営と発

展を嬉しく存じます。

- 東野 学明師(昭和16年)「真言宗法儀の意得」
(青山社・大阪市淀川区西中島7-12-23)
を刊行。
- 蔵本 亮弁師(昭和16年)元気旺盛、気力充実、
血圧正常で寺門興隆のため頑張っています。
- 田畑 賢住師(昭和17年)日本の文化財遺産の仏
像・建築・絵画・古文書・石仏・庭園の保護
管理に精進しています。
- 萩野 泰舜師(昭和19年)大学の名を新聞広告欄
に出しては如何か。全国的に名を知らせるこ
とも大事だ。
- 野路井宏之師(昭和23年)総会には近畿大学豊岡
女子短大出講のため欠席します。私が施設長
である「彦根学園」(重度盲精神薄弱児施設)
の全面改築費用の約50%程出来ました。
- 神野 龍幸師(昭和24年)残念ながら総会に出席
できません。来年は6月25日以前に開催して
ください。
- 北村 議臣師(昭和30年)平成7年秋、理趣経梵
文和訳の一部を完成。
- 三ツ 芳順師(昭和31年)学校を定年退職し、現
在町の社会福祉協議会で頑張っています。
「だれもが安心して住める町づくり」に努力
しています。
- 平松 弘明師(昭和37年)33年間勤務した作手町
役場を3月末に定年退職致しました。
- 新見 和言師(昭和54年)昨年9月から特別養護
老人ホーム内のデイサービスセンターの主任
指導員として勤めています。
- 白木 利幸氏(昭和61年)「七福神巡拝」(朱鷺
書房)を平成7年8月に刊行。
- 南 本源師(昭和60年)平成7年11月19日、池
田瑩輝猯下の戒師、頼富本宏教授ご夫妻の媒
酌によりご結婚。来賓・友人多数出席。
- 前納法恵様(昭和61年卒 前納信義氏御母堂)平
成8年1月『神仏に護られて』を出版。御母
堂様の生涯と故前納氏の思い出をやさしく見
守る感動の書。近代文芸社刊。最寄りの書店
から注文できる。(定価 300円)
- 富田 敦史氏(平成3年)平成7年10月7日、小
松道圓猯下の導師、北村太道教授ご夫妻の媒
酌によりご結婚。今井学長、頼富学部長はじ
め来賓、友人多数出席。
- 塚田信次郎氏・東 作衣さん(平成4年)平成5

年10月に結婚。現在、長野県松本市内に在住。稲谷祐宣師(賛助)平成7年秋、『真言宗事相解説』を刊行。成仏の追求と供養念誦法の意義を解説した礼録を現代語訳で集成。(東方出版、18,000円)

大学だより

種智院大学入学式

平成7年度入学宣誓式が、4月10日、本学講堂にて挙行された。当日は、桂学生部長の司会で進行。御法楽の後、新入学生123名、編入生5名の氏名が呼上された。今井圓明学長より阪神大震災で被災された方々へのお見舞いが述べられ、新入学生には、貴重な学生生活を有意義に送られんことを希望する旨の挨拶があった。また、吉田裕信理事長からも、安心して学べる環境整備につとめていきたい旨の挨拶があった。

続いて、学生自治会代表田原剛君の歓迎の挨拶、新入生代表國分大輔君の宣誓署名があり、御宝号、閉会の辞により終了。なお、来賓には池田瑩輝同窓会長、東田教範同窓会幹事、田中純應洛南高等学校校長が参列。

降誕会

東寺創建1200年の記念すべき本年、降誕会法要は次のとおり実施された。

日時 6月15日(木)

場所 於 種智院大学講堂

日程 午前8時30分 集会・行道

午前9時30分 降誕会法要

(休憩)

正午 甘茶接待

午後1時 記念講演

『東寺の歴史—東寺と教王護国寺—』

講師：上島 有 氏

午後3時30分 節段説法

『弘法大師御一代記』

説教師：渋谷 隆阿 氏

午後4時30分 終了

～降誕会奉仕者～

御導師 今井 圓明

〔職衆〕 西 快薫、神浦芳宏、湯通堂法姫、稲毛 寛、峯 潤雅、藤崎真吾、中島一敬、前田

大輔、鬼頭宗隆、石本隆芳、熊倉正則、森本礼昭、福本智江、増田恵子、清水宏太郎、平野将則、田坂史子、荒井紋子、松原恵子、中島康子、木村英智、中原康雄、長谷川恵淳、宮津智光、羽柴照顕、村上秀光、野田善三、松尾祐圓、山田知圓、玉木良恵、酒井康幸、蔭田大就、木村但馬、福永陽子、岡本摩結子、宮本良儀、笹倉照道

〔献華者〕 川原一修、向井尚紀

〔供華侍者〕 若泉博絵、高見弥生、中島由貴江、黒岩桜児、永井順子、日下部方美、田中康代、岩橋有紀、藤池かづさ、天羽理世、宮崎祥子、坂田紗貴子、中村阿貴、喜田朋子、今村明希子、植村千夏、廣田真紀子

〔会奉行〕 島田大観

〔承仕〕 養学 聡、野口竜一

〔五菩薩〕 岡本秀康、奥田雅之、榊原正道、鈴木将之、瀧谷賢治

〔御輿〕 山下正喜、梨元匡俊、永瀬勝也、山崎浩一、田中稔己、谷垣臣紀

〔指導教授〕 山崎泰廣、児玉義隆、添野智讓、北尾隆心、野口圭也

〔スタッフ〕 木原本佳、松田倫匡、小柴尚紀、真木教日子、阪口明弘、金丸英彦、栗崎宏昭、中川健成

種智院大学降誕会実行委員会

実行委員長 島田 大観

副委員長 中原 康雄

委員長補佐 湯通堂法姫

会計 羽柴 照顕

広報 西 明洋

書記 長谷川芳生

委員 黒岩 桜児 日下部方美

永井 順子 峯 潤雅

真木教日子 宮津 智稔

木原 圭一

学園得度式

平成7年7月8日(土)午前10時より、本学講堂において、学長今井圓明大僧正猊下戒師のもとに挙行。

本年度の得度者は次のとおり。()内は僧名。

加藤 江文(宥文) 生駒 暁(法圓)

井筒 昌彦(大徳) 阪口 明弘(明弘)

福永 陽子(和圓) 森本 礼昭(明範)

金丸 英彦 (法明)	福田 弘二 (明弘)
藤池かづさ (芳純)	松田 章秀 (章秀)
岡村 智 (智澄)	木村 英智 (照道)
小柴 尚紀 (尚紀)	中島 康子 (賢光)
和田 理 (慧英)	小栗 武臣 (弘臣)
越田 城全 (城全)	池田 航 (本舟)
岡野 大作 (雲慧)	富田 敦史 (明竜)
寶山 末子 (妙真)	

学園加行

今年度の学園加行(前期)は、昨年に引きつづき、伝法阿闍梨上井寛圓門跡猊下のもと、大本山大覚寺様の御協力を頂き、7月31日より9月30日までの日程で挙行された。

参加者は次のとおり。()内は僧名。

酒井 康幸 (幸海)	長尾 和人 (宏仁)
高島 秀彰 (圓隆)	真木教日子 (乾瑞)
高橋 吉信 (弘圓)	福田 弘二 (明弘)
池田 真彦 (智然)	岡野 大作 (雲慧)
岡村 智 (智澄)	

頼富本宏教授・密教学芸賞受賞

10月13、14日、東京・真福寺において、第28回日本密教学会が開催され、本学仏教学部長・文学博士 頼富本宏教授が第33回密教学芸賞を受賞された。わが国の密教学研究に新たな地平を確立された功績が評価されたものである。また、若手研

究者を対象とした第1回日本密教学会賞がこの大会より設置され、その受賞者に本学専任講師・北尾隆心師が選ばれた。北尾先生は昭和56年本学を卒業、大正大学大学院博士課程を修了され、平成5年より本学に勤務されている。

なお、今回の日本密教学会学術大会には、井上亮淳教授「中国魚山について」北尾隆心専任講師「初会金剛頂経所説の四印について」野口圭也専任講師「聖地の複合的構造的性」の先生方の研究発表があった。

社会福祉士国家試験合格

平成5年3月卒業の細川景子さんが、平成7年3月実施の社会福祉士国家試験に、見事合格された。これで本学では3人目の合格であり、女性では第一号の合格となった。

細川さんは卒業後、社会福祉法人利生会、特別養護老人ホーム亀岡園(京都府亀岡市)に勤務され、今回の栄冠を獲得された。国家試験に対する後輩諸君への助言として、次のように述べている。

(1)国家試験は科目が多く、範囲も広いので、まとめてするのではなく、少しずつでも毎日継続して準備をすすめること。

(2)日々の努力を怠らず、体調を万全にて試験に全力を出し切ってほしい。

後輩の皆さんのご健闘を心からお祈りしています。

種智院大学公開講座

【密教文化シリーズ】

4月21日(金)「地震とマンダラ」
頼富本宏・本学教授

6月21日(水)「インド密教とマンダラ」
野口圭也・本学専任講師

7月21日(金)「密教法具の世界」
阪田宗彦・奈良国立博物館学芸課工芸室長

9月21日(木)「種子マンダラ」
児玉義隆・本学助教授

【密教シリーズ】

10月21日(土)「声明と平安文化ー特に音楽に関してー」
井上亮淳・本学教授

12月21日(木)「弘法大師と日本文化」
静 慈圓・高野山大学教授

2月21日(水)「東寺後七日御修法について」
今井圓明・本学学長

3月21日(木)「日本密教の系譜」
北尾隆心・本学専任講師

「インド・ネパール密教文化の旅」

このたび、種智院大学有志により「インド・ネパール密教文化探訪の旅」が企画され、合計31名の旅行団が結成された。これほど多くの学生諸君が参加する海外旅行は初めてのことであったが、全員無事帰着。この旅行に参加された今井浄圓先生（本学講師）と池内幸恵さん（本学密教文化コース3回生）に、その内容を記して頂いた。

インド・ネパール密教文化 探訪の旅に参加して

—ギョトウー学問寺訪問記—

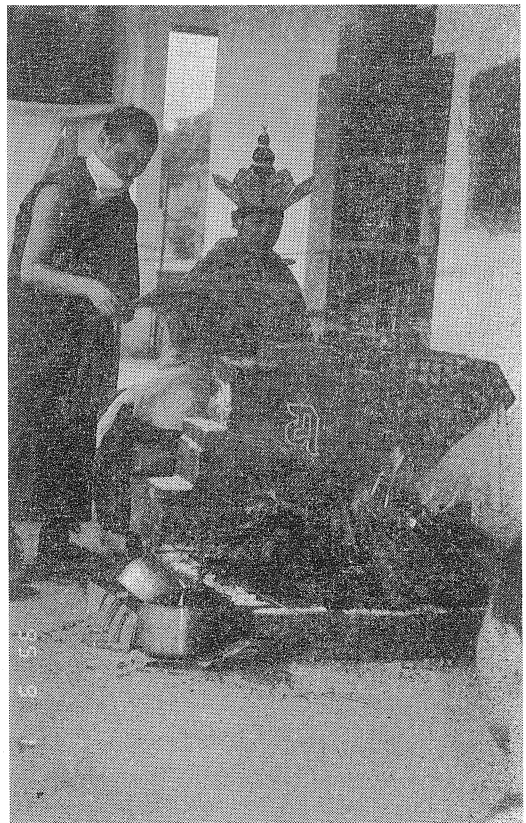
非常勤講師 今井 浄圓

私は1995年8月29日から10日間にわたるインド・ネパール密教文化探訪の旅に参加することができた。この旅行は本学の北村太道教授、宮城洋一郎教授を正副団長として、現役学生・研究生23名をはじめ、本学の卒業生である大学院生4名、保護者1名をふくめて総勢31名の参加者をもって実施された。この旅行の目的が、チベット仏教——生きた密教文化の片鱗にふれることであったことは、いうまでもない。その中で、私が特に興味深かったのは、チベット密教の根本道場 ギョトウー学問寺を訪問でき、そこで行われた息災護摩と砂曼荼羅の作壇作法を見学できたことであった。

まず今回訪問したギョトウー学問寺についてであるが、これはダラムサーラにおけるチベット仏教の新学問寺とも言えるものである。実際のところ、現在は僧院の一部が完成したばかりであって、新本堂の完成は、1996年11月ということであった。周知のとおり、ギョトウー学問寺はギュメ学問寺とともに、密教を学ぶための専門道場である。顕教を修めたチベット僧の中でも、とくに優秀な者しか入学が許されない。

例えれば、デブン寺、セラ寺を顕教と密教の両方を学ぶ宗門大学とすれば、ギョトウー学問寺とギュメ学問寺は、密教を中心に学ぶ大学院の役割をはたしてきたといえるだろう。かつて、1959年のチベット動乱以前のギョトウー学問寺は、ラサのラモチュ（小昭）寺に隣接していた。その後、

インドに亡命したチベットの人の手で、一時期、東北インド ヒマラチャルに移されていた。そして、今般、ダライ・ラマ14世の亡命政府のあるダラムサーラに再建されることとなったのである。ギョトウー学問寺の伽藍再建については、日本の真言宗関係者からも支援の手が差し伸べられており、団長の北村教授は日本側の実行委員会の副実行委員長でもある。いずれ、南インド フンスールにあるギュメ学問寺にならび称される大伽藍が完成されるであろう。



ヤマーンタカ息災護摩供（承仕が吉祥草を炉中に入れる）

余談になるが、現在のダラムサーラは建築ラッシュで、ダライ・ラマ14世の持ち寺であるナムギャル寺院でも三年間をかけた三面の大壁画（曼荼羅）が完成し、ダライ・ラマの新離宮（ノ布林カン）も1995年11月20日に落慶法要が行われる予定である。いずれもチベットの伝統的技法を用いた建築、内装の荘厳が行われており、チベット文化の保護、後継者の育成にも役立っている。ダライ・ラマの新離宮（ノ布林カン）には、チベットの歴史を学ぶための博物館や、刺繍・木工・鑄造・タンカ作成といった美術工芸の技術を伝える徒弟制の学校も併設されている。これらは、いずれもチベット難民の定住促進、難民子弟の教育を目的とするものである。

さて、ギュトウー学問寺事務長 ジャパターイエ大師の温顔に迎えられた我々は、小休止の後、本堂前の野外に設営された護摩壇に向かった。午前10時からの法会であったので、われわれが本堂前に到着した時には、すでに前行としての護摩壇



ネパール目玉寺にて集合写真

の準備は終わっていた。護摩壇の作壇作法を具に見学できなかったのは残念であったが、野外の護摩壇の底（炉台）に曼荼羅が描かれていたのが印象的であった。

ギュトウー学問寺で行われた護摩供は、本尊を護法尊ヤマーンタカとする息災護摩である。護摩供は、導師1名・承仕2名・伴僧8名の職衆によって修された。導師の振鈴を合図に、伴僧も両手に金剛鈴・五古杵を持ちて陀羅尼を誦し始め、日本における呪立法要によく似た形式で護摩供は進行していった。北村団長の解説によれば、本尊の勧請は、既に観念として終わっており、日本の護摩供でいえば入護摩の段階であると云う。

また本尊のヤマーンタカとは、「ヤマを調伏した者」の意味で、ヒンドゥー教の冥界の王 ヤマ神（閻魔）をも降伏する強大な力を有する忿怒尊である。日本における大威徳明王に関係ある尊格といわれる。野外の道場には、このヤマーンタカのタンカを中央に、本尊の左方に般若・母タントラ系のチャクラサンヴァラ（最勝樂尊）のタンカ、右方には方便・父タントラのグヒヤサマージャ（阿閼金剛）のタンカが掛けてあった。ヤマーンタカを中央に掛けるのは、母タントラと父タントラの不二を表すからであろうか。三種類のタンカの前には、本尊用の供物机が置かれ、本尊や眷属の守護尊を象徴するトルマ（小麦とバターを混ぜて塔状にした練りもの）・七器等が置かれていた。導師の左側には脇机が置かれ、机上には孔雀の羽飾りの付いた洒水器・カパーラ器・散米・扇等が置かれていた。また別に供物机が置かれ、机上には焼木・黒胡麻・吉祥草（クシャ）・草の根を束ねたもの・未精製の大麥・精製された大麥粉（ツァンパ=麦こがし）・豆・米等が置かれてあった。これらの支具については、少量ずつ持ち帰ることができた。

わたしが非常に興味深かった点は、下記のとおりである。

①護摩供に参加している導師・承仕・伴僧のいずれもが、次第・法則・手鏡を持たず、すべて暗記していたこと。

②チベット密教の法具である護摩杓の大約・小杓は、日本のものとは比較にならないほど大型であった。とくに大約には溝が彫っており、その口から蘇油が溢れ出ている。日本の蘇油供養の作法とは違い、小杓から直接、炉中に注ぐことはない。

必ず大杓に移し替える所作を繰り返す。日本の供養に比べて、かなりダイナミックである。

③古代インドの伝統そのままに、供物として、吉祥草や草の根が使用されるなど古い形式を遺している。

④ラダック地方などの調査報告では、楽器などが使われたようであるが、今回は金剛鈴と導師のダマル太鼓（手鼓）のみであった。

午後からは、ヤマーンタカの砂曼荼羅の作壇作法の見学であった。砂曼荼羅については、日本においても、マンダラ展などで公開されるようになった。しかしながら、実際に作壇するところを見学させていただくのは、初めての経験であった。色鮮やかな曼荼羅が、作られていくのに感心するばかりであった。砂曼荼羅の材料は、宝石の粉末を使用するのが、本義であるが、今回見学したものは着色した細かい砂を材料にしていた。また線引きに用いられる道具は、円錐形をした管状の鉄製パイプと、鉄製の棒である。パイプは、先端が

管状になっており、非常に細い。この先端部分から着色した砂が出てくる。根元の受け口は、材料の色砂を入れやすいように広がっている。パイプの中央部には、ギザギザの切れ込みがあり、この部分と鉄棒とを擦り合わせて、その震動で砂曼荼羅を描くのである。砂曼荼羅のデザインの色彩に合わせて、異なった色の砂を入れ換えたり、混ぜ合わせて描くのである。砂曼荼羅を描くラマ僧たちは、見本を見ながら描くのではない。彼らは三摩耶形のデザイン、色彩、ならびにその構成を、すべて暗記していた。四人がかりで取り組んでいた。それぞれが熟練した、非常に手早い動きであった。そして、直径1メートル程のヤマーンタカを本尊とする砂曼荼羅を、三、四時間をかけて根気よく作成していったのである。

このように、今回の研修旅行では、生きたチベット仏教を体験することができ、また密教を学ぶことの意義、文化を継承していく大切さを、あらためて思い知らされたのである。

「インド・ネパール密教文化 探訪の旅」に参加して

池内 幸恵

種智院大学で仏教の勉強を始めてから、二年半になります。現在は、主に密教文化にしばって学んでいます。実際、美術館・博物館などで見る仏教美術とは違って、その地に生きた仏教美術に直接接する機会は多くはありません。特に私自身としては、美術館などで見ても、日本の仏教美術はなじみ深く、ある程度自然に体の中へ入ってくるような気がするのですが、他国の仏教美術に関しては、美術品としてのみの目しかもてず、体の中にまで入ってくるような親しみを感じられないのが、正直な気持ちです。それは、その文化が生まれた土地の空気を知らないということも、無関係ではないと考えています。一度でいいからインドの地に立ってみたい、インドの空気に触れてみたいと思い、今回の旅行に参加しました。学問的知識が皆無に等しいこともさることながら、海外へ行くことが初めての私にとっては、たくさんのことをつめこむことは到底不可能だと思ったので、特にこれ、というような目的をもたず、漠然

と見てこようというのが、唯一の心構えだったように思います。結果的には、自分に課題を与えなかった分、色々な視野で自由に見ることができたことは、プラスだと思っています。しかし、その反面、折角普通の旅行では見られないような、貴重な場所へ行ったにもかかわらず、その内容を殆ど不理解のままに終わらせてしまったことは、今回私の大反省点であったと思います。

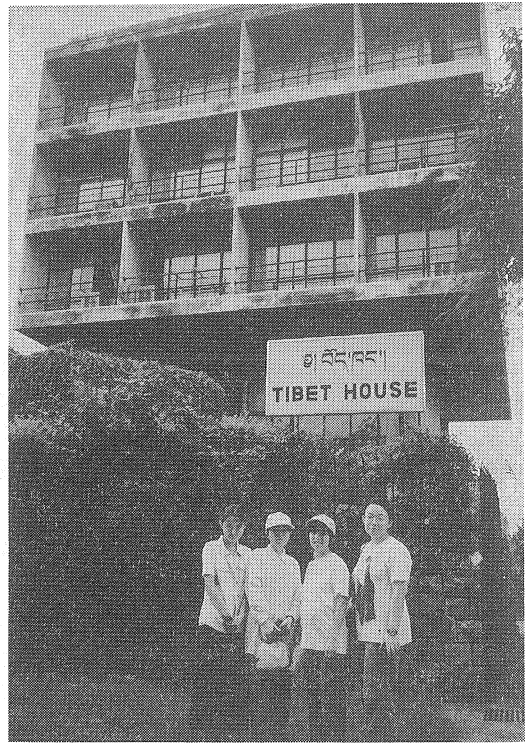
特に、ダラムサーラのギュツァー寺で、初めて目の前でヤマーンタカの息災の護摩を、同じくギュツァー寺で砂絵曼荼羅の制作途中を見学できたこと、そして、私は参加しなかったのですが、インドで本屋さんに行ったり、カトマンズで仏像を見に行ったり、タンカを見に行ったり、と、種智院大学からの旅行、そして北村教授の引率であるからこそその貴重な体験のチャンスが多くありました。しかし、護摩や曼荼羅に関しては、それを見終わった後で詳細を聞いたり、博物館においても、見ている仏像の殆どが、どういう仏なのか理解できずじまいであったり、事前に調べてくることの必要性も痛感しましたが、行った先で初めてその内容を知るので、できれば、旅行前に、旅行先で見るとの大きな説明の場を設けてくれることをお願いしたいと思います。

今回の旅行で、私が最も楽しみにしていたのは

寺院の拝観だったのですが、そこで特に感じたのは、日本の寺院となにかが違うということでした。今、帰って来てそれを考えてみると、ただ仏像や仏画を見るという行為に、抵抗を感じる雰囲気にあるのではないかと思います。日本の寺院で見る風景とは異なったイメージを受けたことは、私の心に強く残っています。ダラムサーラで寺院の中を拝観した後、外へ出て正面から中を見ていた時に、男の人が五体投地をして拝みはじめた姿を見たとき、思わず後ずさりしたことを覚えています。胸がどきっとして暫く動けなくなりました。信仰にも色々な形があって、日本には日本の、インドにはインドのそれぞれの姿があるのだと思います。私には、その姿からストレートに信仰の気持ちが見えたような気がして、この寺院と中の仏は、この地に確実に生きているんだなあという実感を得て、不思議な感動と、近づけない気高さを感じました。

私は、どちらかと言えば、インドよりもネパールの方が好きです。空港からすぐバスに乗ってホテルへ行ったので、着いた時は気がつかなかったのですが、自由行動の時に外に出てみると、あちこちにごみの山があり、すごい異臭がしました。日本と比べてはるかにすごい状態なのですが、何故かその風景を見ても、私は日本よりも綺麗だという印象を受けました。すべての人から、日本人とは違ったパワーを感じたからでしょうか。生きているということが、ひしひしと伝わってくるような、あの張り詰めた空気が美しく感じられたのでしょうか。どことなく「怖い」という印象をもって行った記憶がありますが、実際その地に行ってみると、怖いというよりも、どちらかと言えば「すごい」とか、「雄大」とかといった言葉の方が先に思い浮かんできたような感じでした。それが、今でもすごく不思議な気がして心に残っています。

また、デリーからダラムサーラへ向かうとき、ダラムサーラからデリーへ戻ってくる時は、バスで移動したのですが、夜中に何度も道を間違ったり、山道で車の一台がひどく調子悪くなったり、予定時刻を大幅に上回っての到着になったり、行こうと思ったら、飛行機で行けたということの後で聞いたときには、脱力しそうになりましたが、添乗員の方と話をしたときに、結構好評なんだということを聞いたときは、なるほどなと思いました。あのバスに乗っている時間に、色々な



ニューデリー・チベットハウスにて

ことを考えられるのがよいのだそうです。ぼんやり窓の外を眺めていると、自分のこと、他人のこと、周りのこと、バスが目的地に着くまで、のんびり何にも邪魔される事なく考えられたことを思い出します。日本で乗るのはまた違って、インドの風景の中だからこそ考えられることもあると思います。

十日間のスケジュールは本当にあっという間でしたが、その中でこのような機会をもてたということも、私の中にいい思い出として残っていくと思います。できることなら、この先、今回のような旅行を計画してスケジュールを組む際には、是非、長い距離をバスで移動することを、無くさないでほしいと思います。

今回のような旅行が、もしかすると毎年恒例になるかもしれないとのことですが、私は、色々な方面から、自分のプラスになるような経験をし、また、考える場をもてた本当にいいチャンスになりました。将来を決める大切な時期であり、また比較的自由でもある大学生時代に行くということは、何かをみつけるチャンスとなるかもしれないと思いますので、そうなってくれることを祈ります。

『長谷寶秀全集』の編集について

—長谷寶秀先生の『思い出記』募集ならびに遺墨・写真等の借用についてのお願い—

種智院大学では、昨年度より密教資料研究所を発足させ、事教二相にわたる国内外の密教関係資料の収集と研究に務めております。このたび、本研究所では、種智院大学の前身である京都専門学校において、永年教鞭を執られました長谷寶秀先生の全集を刊行することとなりました。

全集予定目録（出版元・法蔵館）

- 第一巻 長谷寶秀先生の略伝と著作目録、遺墨、長谷寶秀先生の思い出（各山管長猊下・諸大徳・卒業生）、長谷寶秀先生の論文集等。
- 第二巻 『加行指南者意得要略』 付録—長谷先生の直筆本の影印
- 第三巻 『大日経玄談』・『十卷章玄談』・『般若理趣经分科・同末釈』
- 第四巻 『大疏秘記集』 第五巻・第六巻『大師請来梵字真言集』
- 別冊 『三宝院流憲深方 四度次第』 長谷先生の直筆を影印本（折本仕立て）

全集は、ただ今、第一巻を編集途中であります。遺墨には、『長谷寶秀先生遺墨遺文集』（木南卓一先生編）がありますが、なお、これに漏れたものが多いかと思えます。もし、お気付きのものがあれば作品名、所有者等を種智院大学まで至急ご一報をお願い致します。なお、掛軸、色紙、短冊など二、三行位の法語などの格言集、または詩歌などについても、ご通知くだされば結構でございます。また、同窓会の皆様で長谷先生と深いご縁をお持ちの方には、玉稿を頂戴いたしたく、先生のお人柄やエピソード、学問に対する姿勢など、どのようなことでもご執筆を賜われれば幸甚に存じます。ご執筆等に付いては、下記の要項でお願い申し上げます。

記

- 字 数 1,000～2,000字
- 締 切 日 平成8年4月末日
- 送 付 先 〒601 京都市南区壬生通八条下ル 東寺町 545
種智院大学 密教資料研究所（担当・図書館職員 宇垣泰明）宛
- そ の 他 ・執筆するには、お写真〔上半身・無背景・4×3センチ以上〕を拝借いたしたいと存じます。
・長谷寶秀先生のお写真・遺墨・遺品をお持ちの方は、全集に収録したいと考えておりますので、ぜひとも御連絡下さい。

種智院大学入学試験〈後期〉

出願期間 2月19日（月）～3月11日（月）
試験期日 3月18日（月）
合格発表 3月23日（土）

※編入学試験も同日実施 **宗門後継者のための枠を設けます。**

問い合わせ・入試要項の請求

〒601 京都市南区壬生通八条下る東寺町545

種智院大学入試係

TEL. 075-681-6513

FAX. 075-681-5651